

「腹部単純 X 線診断」第 4 版

自治医科大学教授・総合医学 I 永井 純 編著
 帝京大学助教授・放射線科学 築根 吉彦 著
 自治医科大学講師・総合医学 I 田中 修

東邦大学教授・放射線医学第 2 講座

平 松 慶 博

1896 年の Roentgen 教授による X 線の発見以来、約 100 年が経過した。この間に、特に過去 25 年の短い間に、コンピュータ利用による CT のほか、患者被曝を伴わない超音波検査や磁気共鳴映像法が出現した。これらの新しい画像診断法は、国家の医療費を大幅に増加させたが、一方、患者にとって多くの利益をもたらしたことは言うまでもない。しかし、現在においても腹部単純 X 線撮影は、その簡便さ、安価さ、更に 1 枚のフィルム上の情報量の豊富さなどの理由から、その重要性は決して減少してはいない。

しかし残念ながら、新しい画像診断法の出現以来、腹部単純 X 線写真を撮影しておきながら、それを十分読影する努力がなされない傾向がある。むしろ読めない医師が多くなったと言ってもよいかもしれないが、これは最近の医師が怠惰になったのではなく、医学の進歩により、

覚えるべき医学知識が多すぎて、腹部単純 X 線写真の読影をマスターする余裕がないためと解釈する。つまり医学の分業化が進んだ結果と言える。

本書は、腹部単純 X 線写真の読影に必要な基礎的事項をわかりやすく、かつ明瞭な写真で解説している。臓器別・疾患別にまとめられており、更に重要なレントゲンサインが巻末にまとめられている。

一般に医学知識の深まりは、経験の積み重ねによるが、特に画像診断においては視覚経験に頼るところが大きい。学習により疾患の画像所見を記憶にとどめ、次にそれと同様の所見を呈する症例に遭遇したとき、初めて疾患の診断が可能となる。画像は所見を認めやすいものほど、かつそれを繰り返して見たほうが記憶しやすい。

編著者の永井純先生が、腹部画像診断一筋に臨床および研究を重ねて

こられたことは広く知られている。初版は西岡清春先生との共著であったが、版が重ねられるに従い、新しい症例が加わり、写真が差し替えられ、新知見が加わり、更に新進気鋭の共著者を迎えて、完成度が更に高まっている。

最近の印刷技術の向上もすばらしく、例えば、著者も多く引用されている、約 30 年前に出版された Friemann-Dahl の名著、「Roentgen Examination in Acute Abdominal Diseases」と比べて見ると、写真の画質は雲泥の差である。

本書は明瞭な写真と簡潔な記載により、医学生はもちろん、研修医、更に腹部単純 X 線写真の読影を学ぼうとするすべての人に役立つ良書である。

● B5 224 頁 図 73 写真 194
 1994 定価 5,356 円(税込) ㊦400

医学書院 刊(㊦ 03-3817-5657)